

---

# 定番定石低能物語

walkmachine

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

定番定石低能物語

### 【Nコード】

N2306L

### 【作者名】

walkmachine

### 【あらすじ】

転載シリーズ。

超短編です。

人間関係は歯車のようなのだ。

そう例えた人が過去にいたと買い無いとかだけど。

言いて妙だ、と僕は思う。

一人が回ったらみんなが回る。

そんな世界、楽しいのか？

そんな受動的な感覚に吞まれずに、同じ様に回るなら、自分から回った方がいい。

そう考える人々は、革命家だの、発明家だのになっているのだろう。どちらの生き方が正しいのかなんて、結論はおそらく無い。しかし。

少なくとも僕は、自分から回る人物に、憧れる。

憧れて、いた。

「で？」

「で？って……」

「よし」

薄暗い自室の中。

ドアも開かず、いきなり真っ白なローブを着た女が現れた。

「出て行って下さい」

天井からつりさげられたロープの先端の輪の中に首を入れ、間髪いれずに僕は言った。

「私は神だ」

ふーん。

「そうですか」

「もうちょっと驚かないのか？」

不服そうな顔をする彼女。

「もうすぐ死ぬんで何者だろうと関係ないです」

「そうか」

聞いてきた割にあっさりしてんな。

別にいいけど。

「何の用ですか？」

「君を生かしに来た」

えー。

「困りますよ」

「だろうな」

わかってるんじゃないか。

じゃあ。

「じゃあ、何で死なせてくれないんですか？」

「私は神だ」

「さっきも聞きました」

「一応自分が作ったものが壊れると、嫌だったりするのだよ」

「そうですか」

だからなんだというのだろう。

「だからまあ、植物を壊す人間は嫌いなんだけどね」

「じゃあ、僕の事に構う理由無いじゃないですか」

「でも人間壊れるのも嫌いだし」

「矛盾してますね」

「その通りっ」

んー、めんどくせえ。

世界中、自殺者なんて何万人もいるだろうに。

何で僕に限って話が大きくなるんだ。

「死なせて下さいよ」

「嫌だよ」

「何ですか」

「だから、壊れるの嫌なんだって」

「……あなたを説得できたら、死んでもいいですか？」

「んー。もしできたらな」

で。

冒頭に戻る、と。

「だからどうしたというんだ？」

「だからどうしたって……」

話したこと以外になかるーが。

「歯車みたいに回るのが嫌になったんだろっ？」

「はい」

「じゃあ、自分から回ればよかったじゃないか」

「回ろっとなりましたよ。僕だって」

できなかつたけどね。

どこに行っても、いじめられたただけだったよ。

何をしても、笑われて、貶されて、騙されて。

何もできなかつたんだ、僕は。

だから。

だから僕はここで、死ぬんだ。

「んー……君はもしかして、人類は不平等だと思っているのかな？」

「……」

邪魔をするな。

「いや、少なくともそうであって欲しいんだろっね」

「……」

余計な言葉をはくんじゃない。

「そうだったら、自分がそのような状態になっていることを世界の

せいにできるから」

「……そんな、事は」

黙ってくれ。

「残念だけど、答えはn oだよ」

「っ……」

僕だって。

「君は甘えているだけだ。回ろっとするだけで、回らない、臆病者

だ

「……うるさいです」

僕だってさ。

「周りに合わせて生きてきた、臆」うるさいって言ってるだろうが  
「……」

好きでこんななってるわけじゃねーんだよ。

「……あ」

そんな思いを、ストレートに口に出して。

「……」

それを受け止めた彼女は、無表情で僕を見ていた。  
きつと、失望されたんだろうな。

「……うっ」

「……なぜ泣く」

目から汗がこぼれおちる。

泣くのなんて、何年振りだろう。

……・あれ？

泣いている、という事は。

僕は、彼女に失望されるのを恐れているのか？  
なぜだろう。

「失望、しましたか？」

あきらめの念を込めて、そう聞いてみる。

「……いや」

「え？」

返ってきたのは、意外な答えだった。

「君は、かわいそうな奴だ」

「……？」

「空回りしていただけなんだよ」

「周りにほかの歯車がなかったら、回せるはず無いだろう」

「私が、助けてあげよう」

「え、それって」

「歯車、作ってあげるよ」

そう言っつて、彼女は僕に、口づけた。

「っ！」

その瞬間。

僕の意識は遠のき。

どこかへ、消えた。

さいごにみえたのは、かのじよのわらいがおでした。

「早く早くー！」

「ちよつと待つてつてば……」

ニコニコとした顔でほほ笑む、真っ白の服を着た女の子。

僕の大切な、大切な人。

一年前。

精神的に病んでいた僕は、自室で自殺を図った。

そこを偶然助け出してくれたのが、彼女だったのだ。

何力月も部屋から出てこない僕が気になって、ドアをノックしたら  
しい。

でも、返事が来なくて。

異常を感じた彼女が大家さん呼び、ドアを開けてもらったのだ。

目に飛び込んだのはもちろん、首をつった僕。

すぐに救急車で運ばれ、一命は取り留めたが。

あと少しでも遅れていたら、命はなかったそうだと  
奇跡。

そう、よばれた。

で、その後も頻繁にお見舞いに来てくれた彼女と親交を深め、  
そのつながりで何人かの友人もでき。

今に至るって感じた。

「久々のデートなんだから、時間大切にしようよ」

「はいはい」

ばたん。扉がしまる。

「……歯車、できたじゃないか」

「ん？」

その瞬間。

いつかと同じような笑い方で。

彼女が言った言葉の意味を僕が知るのには、天国とやらに行った時で  
した。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2306/>

---

定番定石低能物語

2010年10月21日21時42分発行